


機械の淫魔は欠陥品

めぎ





機械の淫魔は欠陥品

めぎ

とある世界。

かつて大きな戦争が起こり、高度な技術を持つ文明が崩壊。

栄華を誇った都市は崩れ去り、文明は中世レベルまで衰退し、暴走したプラントから溢れた無人兵器により人類は生存すらも脅かされていった。

生き残っていた管理 AI システムはその状況に対応するべく、人類を救済するためのアンドロイドを作り出す。

人々の心に安らぎを与えるよう、女性の姿を模して生み出されたアンドロイドたちは、暴走兵器を打倒し、部分的にインフラを修復していく。

文明の最盛期に比べれば不安定なものではあるが、人類は穏やかな日々を取り戻していった。

そしてそれから数百年。

管理システムは徐々に損傷し、アンドロイドたちはその管理下から離れていく。

結果、自己の改造を重ね、アンドロイド達は独自の外見、機能を持つようになっていく。

未だ僅かに稼働するプラントから生み出される新型アンドロイドたちもその影響を受けていく。

電子頭脳の根底に刻まれた人類を守護、管理する存在であるという認識も弱くなり。

女性型アンドロイド達は人々に亜人、もしくは魔族と呼ばれるものとなっていった。

周囲を森と山に囲まれたとある村。

日が沈みかけたところにのどかに小鳥のさえずりが流れる畑。

その畑の中で、年の頃は十代半ば程度の少年が鍬を振り下ろしている。

あまり農作業には慣れていないのか、すこしおぼつかない様子で時間をかけてゆっくりと小さな畑を耕し終わると額からこぼれた汗を拭う。

「おーい、クルツ。今日はもうあがっていいぞ」

年配の男性が声をかけると、少しふらついた様子で少年は男性に鍬を渡して畑の柵に体を預ける。

「手伝ってくれるのはありがたいが、本業でもないんだからそんなに無理せんでもいいぞ。今日は久々にお客さんがくるんだろ？」

「はい、それじゃお言葉に甘えてそろそろあがらせてもらいます」

地主の男性に一礼すると、クルツと呼ばれた少年は少し離れた場所にある自宅へと戻っていく。

周りの家屋と変わらぬ一軒家。

その扉を開けると石造りの壁の中、この時代には似つかわしくない複雑な機器、金属製の工具が机に並び、奥の部屋には金属と動物のものではない革に覆われた綺麗な椅子が据え付けられていた。

クルツは一息つくとも工具や機器の整理を始め、椅子の横の台に並べ直していく。

やがて辺りが薄暗くなったころ、扉をこんこんと叩く音にする。

クルツがその音に答えて扉を開ければ、暗がりの中からローブを羽織った女性が姿を表す。

一例をしてからローブを脱げば絹のような白い肌に、穏やかな笑みをたたえた顔が覗く。

美しい金髪は腰まで伸び、羽飾りのように伸びた耳が上を向いている。

エルフ、彼女はそう呼ばれている「亜人」の一人であった。

「お久しぶりです、クルツさん。……あの、お父様は」

「去年、病気で。父ももう一度会いたがっていましたが……いえ、お気になさらず。もう良い年でしたから。早速ですけど。体の調子はどうですか？」

「まあそれは。お悔やみを申し上げます。……そうですね。左腕部の関節が少し。診ていただけますか」

「はい。それでは」

クルツが手招きすれば、エルフは奥の部屋へとすすみ示された椅子にゆっくりと腰掛ける。

工具を手にしたクルツがその傍らに立つ。

「それじゃ、お願いします」

「はい……び、きゅ……ん……」

小さく開いたエルフの口から明らかに人が出す言葉とは異なる音が漏れると、上腕部の白い肌が捲れて開いていく。

その裂け目からは一滴の血も流れることはなく、それどころか中からは肉や骨ではない、傍らにおいてあるような機器や配線類が覗いている。

クルツはそのことに驚きもせず、冷静に工具をいれて一つずつ部品を外して机に並べ直していく。

「ん……くぁ……ど、どうですか。ん、くすぐったい……」

「あ、すいません！ アクチュエーターが少し焼けてるみたいです。何か無理しましたか？」

「は、はい。ちょっと魔物との戦いで……」

「亜人の皆さんが僕らを守るために戦ってくれているのは知ってますけど……あまり無理をしないでくださいね。この部品だったら代わりのが……

あ、あった。じゃ、交換しますね」

亜人、と呼ばれているのはかつて人類の守護のために作られたアンドロイドの末裔。いや、新型のアンドロイドというのがかもしれない。

なにかのデータを参照した結果なのか、人類がそう呼び始めたのが先でその影響を受けたのか、今となってはその理由はわからないが。

アンドロイドたちは古の物語の種族の外見、能力を模したものに变化していた。

彼女たちを生み出した文明の技術、その殆どは失われているが、クルツの家系には一部の知識が受け継がれている。

数十年前、クルツの祖父の時代辺りからその事を知った亜人たちが整備を受けるために時折立ち寄るようになり、いつの間にやらそれは家業となっていた。

一年前、父親が死んでからはクルツはまれにやってくる亜人を整備して対価を受け取り、その合間に村仕事を手伝う毎日を過ごしている。

「……終わりました。動きはどうですか？ 後はなにかありますか？」

元通りに皮膚の開放部を閉め直すと、エルフは動きを確かめるように肩を回してからはクルツに微笑みかける。

「問題ありません。ありがとうございます。あとはアニメの補給をさせていただきますか？」

「あ、はい、どうぞ」

相槌を打つとクルツは椅子から伸びるケーブルを掴み、エルフに手渡す。

「アニメ」と彼等が呼んでいるのは電力そのもの。かつてのインフラの一部から、電力が人類の村には供給され続けている。

文明最盛期に比べれば僅かな電力ではあるが照明や暖房に使われる程度は賄えている。

整備用の機器と共に、アンドロイドの充電に使うための大容量のケーブルがクルツの家には備え付けてあった。

しかし、ケーブルを受け取ると、エルフは困ったような笑みでクルツを見つめている。

「あ、あの……クルツさん。申し訳ないのですが……」

「……あ！ し、失礼しましたっ！」

顔を赤らめ、後ろを向いて背筋を伸ばすクルツ。

少年の視界から自分が外れたことを確認すると、エルフは胸元をはだけ豊かな乳房をさらす。

白い肌と対象的な生々しさを持つ左の乳首を自らの指でつまみ、ゆっくりと回転させればかちりと音がする。

再度、異音がエルフの口から漏れると共に乳房が開きその内部機構がさらされていく。

クルツが振り向いていたりしないことを確認すると、エルフは機構の中央付近のコネクタにケーブルを繋ぎ、胸は開いたままはだけた衣服を戻していった。

背後の光景をどうしても想像してしまうクルツの鼓動は早くなる。

クルツが垂人たちの整備をしている部分は手足がほとんどであり、重要な機関である胴体部……胸部のハッチをいじったことは一度しか無い。

しかし、その時の光景、少し機器をいじるたびに悩ましい声が漏れ、怪しく回路が点滅する様は忘れることができない。

今、その時のようなことが繰り返されていると思えば。

振り向きたくなる衝動を必死で抑え、目を強く瞑る。

「……終わりました。いいですよ」

くす、と小さな笑いと共にかけられた声を安心したような、名残惜しいように思いながら振り向き直す。

「では、朝までこのままにさせていただきますね。ありがとうございます」

「あ、は、はい……。じゃ、僕も今日は休みますので……」

ぎしぎしと床を軋ませて、クルツは寝室へ向かう。

整備室から出る前にもう一度振り向けば、エルフは安心したような顔で目を閉じている。

少しだけ胸に浮かんだ、衣服をはだけてケーブルの「点検」をしたいという欲望を抑え込みながら、そのままクルツは自分のベッドに横になった。

エルフが村を旅立ってから数日後。

クルツの家には村の長老が訪ねてきていた。

「ゴブリン、ですか？」

「うむ。この前お前さんの家にも来ていたエルフ様、彼女から聞いたんじゃないかな。村外れでゴブリン共の群れを見かけたと。で、若いのを何人か送り込んでみたんじゃないが」

ゴブリン。

背丈は子供くらい。亜人と同じく機械の体を持っではいるがその姿はエルフとは似ても似つかぬ、機械そのもの、鉄の塊のような魔物。

クルツも何度か村に入ってきたゴブリンを見かけたことはある。その時はすぐに村の大人たちが叩き壊し、残骸はクルツの家が引き取っていた。

しかしそんなに簡単に片付いたのは一匹だけであったからだ。

小柄に見えてもその力は人間の男性を上回る。あんなものが群れになっていたら村にとっては脅威となる。

「確かにかなりの数の足跡が残っていたと。今からエルフ様に戻っていただいて村の警護に協力してもらおうかとも考えたが。一つ思い出してな」

そういうと村長は家の中に転がる機器を見回してからクルツに向き直る。

「お前さんの爺様が若かった頃にな、同じようなことがあったんじゃないよ。その時にな、村外れの神殿……ほら、山の方のアレ、わかるか？」

その場所にクルツも心当たりはあった。崩れかけた古代の遺跡。神殿と呼ばれてはいるが本当は何なのかはわからない。

ただ、みだりに入ってはいけないと長老自身が強く村人に言い聞かせていたはずだが。

「あそこにな、爺様が一人で入っていったんじゃないよ。なにかその、お前さんの家に記録があったとかなんとか言っとったような気がするがよく覚えとらんじゃ。なにか、そういったことは聞いたことはないか？」

黙って首を振るクルツ。家にあった書物には目を通してはいるが半分以上は理解できていない。また、口伝での教えは失われていることも多い。

「そうか……。まあともかくな、爺様が神殿に一人で入ってなにか、まあお祈りでもしたんじゃないかと思うんじゃが。ともかく次の日からゴブリン共がピタっと出なくなつてなあ。おまえさんがなにか知っとったら、と思ったんだが。そうか……」

ちら、ちら、とクルツを横目で見る長老。

はあ、とため息をついて長老を見返すクルツ。

「わかりましたよ。力になれるかどうかかわからないですが。ともかくなにか記録が残っていないか、もう一度調べてみます。それでいずれにせよ一度神殿にはいってみます。それでいいですか？」

「おお。助かる、助かる！ では頼んだぞ。上手く行けば今年の畑仕事はなしにしてやるからの」

あまり気は進まなかったが狭い村の中のこと。長老の頼みを断れば暮らさづらくなるのは間違いない。

それに普段入るのが禁じられている神殿の中がどうなっているか興味がな

いわけではない。

軽い足取りででていく長老を見送ると、クルツは久方ぶりに倉庫を開け、その中の書物の一つずつ取り出しては埃をはらっていった。

村から神殿と呼ばれている遺跡まで、歩いて数時間。

以前にやってきたのは何年も前のことだが石のような、金属のようなものでできたその異様は遠くからでも目立ち、迷うことはなかった。

神殿、と呼ばれてはいるがこの建物が何なのかは村の誰も知らない。そもそも入口の分厚い扉はびくともせず、誰も入ることができないものだと思っていた。

その神殿に祖父が立ち入ったことがある、とは知らなかったが。

村長が帰ってから家の書物を読み漁ったクルツは埃を被った書物の中から祖父の記録を見つけ出していた。

断片的な書き残しではあったが、それでも何もわからないよりはマシだろう。

「ええと。これ、この部分かな。扉についでる鏡のようなものの横……ここに……」

腰につけた鞘から小さなナイフを抜くと、その切っ先に親指を当て数滴滴った血液を垂らしていく。

「こんなことで本当に……あ」

鏡のような部品が光を放つと古代語の文字が浮かび上がり流れていく。

クルツはある程度の古代語を読むことはできるが、目まぐるしく流れていく文字は捕らえきれない。

『管理者 DNA パターンを確認しました。登録完了。ゲートロック、解除します』

箒もったような古代語の声が扉からながれると重々しい音を立て、扉が自動的に開いていく。

その光景だけでもクルツにとっては眼を見張るようなものであったが、さらに開いた扉の隙間から誘うように冷たい光に照らされた通路が奥へ伸びている。

意を決してその中に踏み込んでいくクルツ。

カッン、と足音を立てて扉を越えたその時。背後で扉が開いたときと同じ重々しい音を立てて閉まっていく。

「え！　ちょ、ちょっとまって……！」

慌てて踵を返すがすでに扉の隙間はクルツの肩幅より狭くなっている。無理に入れば潰されるだろう、そう思った時には、がこん、と轟音を響かせて扉は完全に閉まりきる。

「うわ……これ大丈夫なのかな、出られない、とかないよね。……あ」
見返せば、扉の隅に先程血を垂らしたものと同じ様な板がついている。まだ血が乾ききっていない親指を恐る恐る乗せてみればその周囲が輝き、再度扉が開き始める。

「ああ……僕が触ればいいのか。びっくりした。よく考えたら爺ちゃんはお出てきてるんだから、開かないわけないよね」
ふう、とため息をついて奥に向き直るクルツ。

しかし、その耳にキィキィという軋むような、鳴き声のような音が伝わってくる。

騒いでいる声を聞きつけたのだろうか、通路の奥からひたひたと近寄ってくる物音。

天井の灯りに照らし出されたその姿は、ゴブリンと同じような、身長はさらに低い魔物が数体。

むき出しの金属骨格から機構を覗かせ、硝子でできた単眼をクルツに向けている。

しかし、明らかに敵意を持ったそれに睨まれてもクルツは慌ててはいなかった。

「うわ。やっぱり出た。書いてあるとおりだったな。よし、それじゃこれを……」

クルツは首から下げた円形のタリスマンを魔物に向けて構えると、その背にあるボタンを押し込む。

すると、タリスマンが青色に発光し次の瞬間、見えない力に打ち据えられたかのように魔物たちの動きが止まる。

さらに、ある魔物は身体から火花を散らし、また他のものは悶えるようにのけぞって動きを止める。

クルツが一步踏み出すと、まだ動いている後ろの魔物たちは怯えるように背を向けると逃げ出していった。

最後の一匹が姿を消し、辺りに静寂が戻ると緊張の糸が切れたクルツが脱力して肩を降ろす。

「ふう……本当にちゃんと効いてくれた。すごいな、これ。ゴブリン退治くらいこれがあればできるんじゃないかな」

祖父の記録の中にあった魔物避けのタリスマン。効くのかどうか半信半疑

ではあったがどうやら本物らしい。

村人にも試してもらったのだが、どうやらクルツ以外が操作しても使えないものようだった。

ともかく、これでその記録が正しいことは確かになった。

だとすれば神殿の奥、その部屋にある祭壇とやらで記録の通りの儀式を行えばゴブリン達はおとなしくなるらしい。

何故に神殿の儀式でそうなるのか、ゴブリンがなんなのかクルツの考えの及ぶところではなかったがそれはそういうものなのだろう。

神様が決めたからなのかかもしれないし、そうでないのかもしれない。

クルツ自身が生贄になるというわけでもなし、タリスマンがあればおそらく安全だろう。

そう思うと、急に今年の農作業免除の報酬は魅力的に思えてきた。

「よし、じゃあて早く済ませちゃおう！」

何度かの魔物の襲撃をタリスマンで退けたクルツは一際巨大な扉の前に佇んでいた。

おそらく地下に入っているとは思うのだが、正確な位置はわからない。

ただ、祖父の記録が正しければこの辺りが最深部、目的の「祭壇」であろう。

入口についていたものと同じ様な板が扉に据え付けられている。

途中にも同じ様な扉をいくつか超えてきたが、どうやらもう血をかけなくともクルツが触れることだけで鍵が解除されるらしい。

板に親指を当てればガチャ、と錠前の外れるような音がしたあと、ゆっくりと扉が開いていく。

隙間から覗く「祭壇」の部屋は灯りが弱くはっきりと見えないがどうやらかなりの広さがあるようだ。

その奥、暗闇の中に。ゆらり、と影が立ち上がる。

こつ、こつ、と乾いた足音を立てながらその影がゆっくりと近寄ってくる。

もしやここにも魔物が、と身構えるクルツ。

暗闇との境目を影が超えて、アニマによって作り出された光がその姿を照らし出す。

美しい女性の体、褐色の肌に少し癖のついた長い銀髪。

その顔は控えめに言っても絶世の美女、少女のようなあどけない可愛らしさと怪しい色気を同居させた完璧な造形。

豊かな乳房を讃えた体を覆う、黒い下着のような、鎧のようにも見える装飾



物。

年齢は十代後半というところ。

すらっとした肢体は、クルツが並んでも肩のあたりまで背が届くかどうか。そして、その背中にはコウモリのそのような、機械でできた羽が伸びている。

怪しい藍色の瞳に見つめられれば思わずクルツはたじろいでしまう。

「ふふ……。まさかここに人間が現れるなんて。驚きましたが……行幸、というべきでしょうか」

薄く開いた唇から漏れる美しい声。

しかし、何故かぞくり、と背筋が凍る様な感覚を覚えてクルツは後ずさる。

「え、ええと……あ、貴方は……亜人……ですか？」

「亜人、ですって。馬鹿にしているのかしら？ 魔族ですよ、魔族。初めて見るんですか？」

魔族。

聞いたことはある。亜人よりももっと強力な力を持つ者たち。

その中には魔物と同じく人を害する者もいるという。

彼女が本当に魔族だとしたら、こんなところで何をしているのか。

祖父の記録には魔族と出会った、などとは書かれていなかった。

「ふふふ……。怯えていますか？ まあ構いませんけど。私はサキュバスのリーゼロッテ。一応、名前くらいは教えてあげましょう。

貴方は……これから私の慰み者になってもらいますね。こんなところに閉じ込められてアニマだけで稼働するのもう限界……じゃなくって。ああ、こちらのことです。忘れてください」

怪しい笑みをたたえながらゆっくりとクルツに歩み寄ってくる「サキュバス」。

立ち寄った亜人から聞いたことがある。

彼女らサキュバスの動力源はアニマではなく人の精液。

一度事を始めれば恐ろしい勢いで吸い尽くすという。

自分を怖がらせるための作り話だと思っていたが。

「ふふ、その様子ではどうやら知ってはいるようですね。安心しなさい、殺したりしませんよ。死にそんな気分にはなるかもですが」

「あ、ああ……」

村に訪れていた優しい亜人たちとは何かが違う。

それを感じたクルツは腰が抜け、その場にへたり込むと口角を歪ませて微笑んだリーゼロッテが顔を寄せてくる。

「一応、そちらの名前を聞いておきましょうか」

「う、あ……ク、クルツ……」

「俗な名前ですねえ。まあ良いです。あら、もう勃ってますね。ふふ、私の身体、まだ見せてもいないのに。では……こうしたらどうなっちゃうんでしょうか」

一瞬、藍色の瞳が輝いたように思えると、リーゼロッテの乳房を覆う外装がウィ、と音を立てて背中側に畳まれていく。

その下から現れる豊かなむき出しの乳房。

何度か垂人のメンテナンス中に見てしまったことはあったが、その時とは状況が違う。

気のせいか、部屋には甘い香りが立ち込めているような気がする。

いけない、このままだと本当に……。

息を荒くしたクルツは必死で後ずさりながらそうだ、と思いつき胸のタリスマンに手を伸ばす。

魔物の機構を狂わせる力があるタリスマン。これを使えばひょっとして……。

淡い期待を寄せ、リーゼロッテにタリスマンに向けてボタンを押し込む。

タリスマンは魔物に向けたときと同じく、青い輝きを放ち始める。が。

「……なんですか？ それ。そのくらいの電磁波で魔族をどうにかできるとでも？ ちゃんと電磁シールドくらいされてますから。さ、諦めて観念なさい」

褐色の指がクルツのズボンにかけられ、ゆっくりとずり降ろされていく。

「ふふ、まだ子供なのになかなか、ですね。良いですよ。燃料補給のための行為でも、快楽信号は高いほうが素敵ですから」

すでに起ち上がっているペニスを前に、淫靡な笑みを浮かべるサキュバスは亀頭にそっと指を伸ばすと軽く力を込める。

「ふえ……あ……や、やめ……ふあ……」

女性経験など無いクルツは耐えきれず、少女があげるような細かい悲鳴を漏らしてしまう。

「な、なんですかその可愛い声は……女の子でもあるまいし……ぴゅ、あ♡

そ、そんな声だされたら私のほうが変な気分……。い、いえ。興奮度が上昇とか、していませんよ。ほ、ほら、もっと泣き叫ぶといいです。誰も助けになんかきませんから」

「み、あっ！ く、ふううう……ひうっ！」

「も、もうっ！ 貴方、かわいすぎませんか！ 人間のくせに……ぴゅ、ぎ、

がび！　せせ、性欲値が上昇しし、ぴゅぎん！　ん、もうっ！　え、エラーをおこしたりとかじゃありませんよ。……で、でもこれ。ちょっと排熱しておいたほうがよいかも、ですね……」

心なしか尖り始めている左乳首にリーゼロッテは自分の指をかけると一気に回転させる。

同時にカチリ、と音がして左乳房が開き始める。

クルツの知る亜人と同じ位置のメンテナンスハッチ。

以前に見たそれよりも複雑で繊細そうな内部機構が激しく点滅し、唸りを上げている。

「……な、なんですかっ！　貴方、私のメンテナンスハッチを見てそ、そんな、おおきくするなんて！　お、おかしくありませんか？　そ、そんなの見たら、わたしだって……ぴ、きゅううん♡　ん、も、やだ。我慢できなく、なっちゃう……」

頬を染めたりーゼロッテは、胸の回路の点滅を早めながら小さく悶え始める。

揺れる右の乳房と、激しく反応する左胸の回路を見せつけられるようにされれば、クルツの脳裏に間違えて回路に触ってしまった時のエルフの悲鳴が思い起こされる。

そうだ、今なら……。

もう一度、クルツは胸のタリスマンに手を伸ばしまっすぐリーゼロッテの左胸に向ける。

「ぴゅ、い……あ！　ちょ、ちょっとまちなさいっ！　今は……！」

かち、と裏のボタンを押し込むめばタリスマンが輝くと共に不可視の電磁波がリーゼロッテの回路に浴びせられる。

「……ぎゃぴいいい！？　かか快楽中枢回路に深刻なエラーがはっせいしししぴゅぎんぴゅぎんがびー！？　せせ性欲制御にしっばいしししひぎいいい！？」

電磁シールドになっている人造皮膚を開け放った無防備な状態で電磁波を浴びせられたリーゼロッテ。

胸の中に収められていたのは彼女の性感を司る快楽中枢回路。それがエラーを起こしてしまえば壊れてしまいそうな性欲に襲われて、悶え転げてしまう。

「し、四肢制御にノイズが発生していまま、ぴゅううんっ！　ひあああっ！

な、なんですかっ！　わたし、いったい……ひぎいっ！？　や、じょ、女性器ユニットが熱い……ん、あ、あ、ああああっ♡」

ウィ、と小さな音がしてリーゼロッテの股間を覆う装飾具も収納される。
その下から現れたつつん、とした割れ目の上にはクルツが見たこともない、
細かな四角が集まった文様と古代語での番号が記されている。

「ん、あ、やだ、がまんできな……く、ふぁ♡ みゅ、あああんっ！ が
びっ！ かか快楽信号が不足していま、ま、がび！ 重大な損傷の恐れが
あります、た、ただちに性行為をかいし……く、あ……こ、こんなっ、こん
なああ……ひみいいっ♡」

もう耐えられない、とばかりに床に股間を擦り付け涙を流すリーゼロッテ。
その姿にクルツの劣情は刺激され、ペニスは限界まで勃起し、それを彼女に
つきつけるような格好になってしまう。

「な、なんですかぁ……それ、ば、馬鹿にしてるんですかぁっ！ ポンコツ
サキュバスだとでも思ってるんですか……がびいい！？ かか、快楽中枢
回路負荷がぞうだいし、し、た、直ちに女性器ユニットに男性器をそうにゅ
う、そ、そうにゅうししし……ひぎゃあああ！ や、だめ。セックスしないと、
こわれるっ！ こわれるううう！ あ、貴方のせいですよ！ せ、責任
とって……みぎいいいいっ！ は、はやく、はやく、いれて、くらさっ♡

らめっ♡ こわれるうっ♡ こわれひゃうううう！ がびいいいいー！」

「え。え……あ、あの……リーゼロッテ、さん……う、うん……！」

先程まで恐れをなして震えていたクルツだったが、異常を起こして悶えな
がら助けを求めてくるのその姿に頭の芯が溶けそうな興奮を覚えてしまう。
悶え転げながらも四つん這いになって尻を突き出すリーゼロッテ。

その股間の割れ目、人間の精を搾り取るための女性器ユニット。

高濃度のタンパク質溶液を動力源とするサキュバスにとっての命のような
機構。

怪しくひくひくと蠢き、その度にぬらぬらとした液が吹き出してくる。

女性経験などないクルツも、その魔性の魅力に抗うことはできず本能のま
ま怒張をその割れ目にあてがっていく。

粘度のある液をかき分けて、割れ目に先端が潜り込めばちゅぷ、と音を立て
て潜り込む。

少年の粘膜に絡みつくように内部のヒダが動き始めれば、ぞく、と背筋に快
感が走る。

もっと奥に入れたい、サキュバスの身体を味わいたいという欲望がクルツ
を支配してより深みに潜り込ませていく。

「んぁ……っ！ す、すご……！ リーゼ、さん……っ！ く、あああ……！」
「ぴゅぎん、がび、きゅうううううっ！？ ひぎいいいいっ！ き、き、き

も、きもち、い、あっ！　だ、男性器の挿入を確認……。く、ふ、あっ♡
や、感度セッてい、おかしく、なってるううう♡　だ、だめ、うごいひゃ、
らめっ♡　い、いまうごかれたら、快楽中枢回路……びぎゅああああっ♡
や、やんっ♡　きもひよすぎる、のおおお♡」

リーゼロッテの悲鳴も構わず、ひたすら、乱暴にペニスを押し込み最奥の敏感なセンサーを突き上げるクルツ。

その度に左胸の回路は彼女の感情自体を示しているかのように激しく点滅を繰り返す。

「みゃああああ♡　だ、ダメ。クルツ、やめ、やめ、イ、イっちゃううう♡
♡　わたし、もうイっちゃいますううう♡　ぴゅううん！　かか快楽信号がオーガズム閾値に達しまま絶頂しまぜぜ絶頂しぜっちょうしししいひぎ
いいいいっ！　……あー——っ！」

ぎゅうん、と機構が動作する音がするとリーゼロッテの中が震え、収縮する。

クルツはその一撃で容易に限界を超え、一気に精液をリーゼロッテの内部に吐き出していく。

「じえ、ジェネレーター再起動……っ！　あ、こ、これ、出力、すご……！
……あ！　ぴゅ、ぎ、がび！？　遺伝子パターン解析……管理者情報を検知……へ？」

人造子宮に流れ込んだ精液が、そのまま機能停止していたジェネレーターに注ぎ込まれ、リーゼロッテの身体に力が溢れてくる。

しかし、人造子宮内部のセンサーに精液がかかった瞬間、びく、と腰が震え、今まで動作していなかったプログラムが、リーゼロッテの意思を無視して起動する

「ま、まさかクルツ、貴方……や、だめっ！　ぴゅぎ！　管理者遺伝子情報を確認しました。只今より本機のマスター登録を行います……ちょ、ちょっとダメです！　今のナシっ！　……ぴきゅ。マスター登録が完了しました。……えええええーっ！？　そ、そんなぁ……」

先程の高慢な姿は何処へやら、四つん這いのまま情けない顔でクルツへ振り向いたリーゼロッテ。

その視界に少年の顔が浮かべば、彼が自らの所有者であるとの認識がはっきりと電子頭脳に刻み込まれていく。

間違いなく今の行為でクルツはマスター登録されてしまっていた。

「あ、貴方……貴方のせいですよっ！　責任、とってくださいっ！」

「え、ええと……つまりその、僕が、その、リーゼロッテさんのマスター……主人になった、ってことですか？」

「リーゼでいいですよ。はあ。はい。そうです。もうこれ、変更できないで
きないんですけど……。まったく、どうしてくれるんですか。まさか貴方が
管理者の血筋だったなんて……」

褐色のサキュバスは床に座り込んで膝を抱えたままいいじとクルツを睨
みつける。

陰々滅々とした口調はまるでこの世の終わりを迎えたかのようだ。

「そういえばさっきも扉が……なんなんです、管理者、って」

「ずーっと昔。この遺跡や私達の先祖が作られた時、その管理を行う権限を
持つ人達がいたんです。それが管理者。遺伝でその資質が受け継がれるとは
聞いたことありましたが、まさかまだ残ってるとは……迂闊でした。管理者
のマスター登録は精液で行うのは知っていましたが……はあ……私はわり
と最近、百年くらい前に製造されたのにまだそんな機能が組み込まれてい
たなんて……」

「ご、ごめんなさい……。で、でも……」

「ええ、そうですよ！ 貴方を襲った私がわるいんですー。それでいいです
か？ ふん！ もう、落ち込んでるのに……。ま、まあ。貴方がちょっと可
愛いことは認めてあげます。ま、もうマスター登録されてしまったものは仕
方ありません。貴方の命令には今後逆らえませんし傷つけることもできま
せん。どうぞ、使い魔にでもなんでもしてくださいませ」

不貞腐れたまま面倒くさそうに頬を膨らませるリーゼ。

「そ、そういわれても。ところでリーゼさんはなんでこんなところに？」

「ぐ。それ聞きますか……。ええ、答えますよ。マスターさんのおっしゃる
ことですし！ 私達はこういう施設、あなた方は神殿って呼んでましたっ
け？ これのメンテナンスが本来の役目なんです。で、どうもこの管理
システムがエラー起こしてるらしいってことで。魔族の中で私が見てくる
ことになったんです。もともと私達はこういう施設の管理のために生み
出されたものですからね。最近だいたいいいかげんになってるように思いま
すが」

「あ。ここらへんでゴブリンの群れが出てるってひょっとして」

「ゴブリン？ ああ、野良ドロイドの魔物にそう呼ばれてるのがいました
ね。はい、それもその影響でしょう。管理から外れて暴走する個体が増えて
るのだと」

「なるほど……あれ？ それじゃなんでまだゴブリンが……？」

ぐぬ、と口元を歪ませたリーゼが祭壇の奥を眼で示す。

その先にある機器が赤い点滅を繰り返し、板には文字が浮かんでいる。

はっきりとはわからないが不調を起こしていることは間違いなさそうだ。

恐らくこれをつかってゴブリンを止めることは無理そうだ。

「……私じゃありませんよ！　べ、別に操作間違えたとかそういうんじゃないくて、もともと年月が経ちすぎて壊れてたんですー！　たぶん。こりゃまずい、と思って戻ろうとしてもなんかドアロックが私の権限じゃ解除できなくなってるし！　アニマの充電器はあったから稼働はできましたけど！　ひょっとしてわたし、ずっとここに閉じ込められたままなのかなー、とか思い始めたら……あ、あれ……？」

クルツが立ち上がり、扉の板に手を当てればがこん、と音が響き扉が開き始める。

「な、なるほど。管理者権限なら開けたんですね……。ふ、ふん。まあ、貴方のおかげで助かったことにしておいてあげます。命令でもなんでもするといいいんじゃないですか？」

ぱさ、と髪をかきあげながらすました顔になるリーゼ。

その本性を知ってしまったクルツにはもはや恐ろしい存在とは思えなかったが。

「いや別に命令とか……あ！　そうだ！　ここで止められないなら……リーゼさん。ゴブリン退治とかできる？」

「まったく、舐めてるんですかね？　高貴なサキュバスにゴブリン退治い？

ああはいはい、やってやりますよ。他ならぬマスターさんの命令ですもの。ええ」

神殿を出て、ゴブリンを見かけたという村外れに向かう二人。

その道すがら忌々しそうにリーゼは毒を吐き続ける。

「ご、ごめんなさい。確かにどれだけ数もいるかわからないし、危険かもです……」

「む。百匹いようが千匹いようがゴブリンなんか相手じゃありません。やっぱり舐めてますか？　わかりました、今後のためにも私の性能を見せてあげましょう……おや？」

し、と指を口に当ててクルツに黙るように諭すリーゼ。

そのまま木陰にクルツとともに身を潜めると、砂利道の少し先、鬱蒼と茂っ

た林の方へ向ける。

すると林の中からキィキィという鳴き声とともに小柄な鎧姿のような影があらわれる。

その影は見る間に数を増し二十匹は超えている。

小さくてもその臂力は人間を上回る。あの数が襲ってくれば村の被害はかなりのものだろう。

「た、大変だ。リーゼさん！」

焦りを浮かべるクルツと対象的に気怠そうな顔のリーゼはふぁ、と欠伸の様な声をあげる。

「亜人も欠伸するの？」

「ですから、亜人ではなく魔族！ 隠れている意味もないですね。ではここで見ていてくださいな。あ、さっきのソレ、別に支援とかいらないですから！ また変な時に使われて私が不具合起こしても困りますからね！」

ぴ、と胸から下がっているタリスマンを指差すと目を吊り上げる。

勢いに押されてクルツが頷くと、リーゼはくりり、と振り返り畳まれていた背中の羽を伸ばす。

そのまま地を蹴って空に舞うとゴブリン達の頭上に到達する。

「喰らいなさい！ はあっ！」

リーゼの叫びが響くと同時に手の甲が開いて宝石のような紅玉が現れる。

紅玉が光を放ったかと思うと、赤い炎のような光が発せられてゴブリンの群れの中央に放たれる。

着弾とともに小さな爆発が起こりすべてのゴブリンが閃光に包まれる。

その爆風は目を覆ったクルツの側まで届き、小石や千切れたゴブリンの部品が飛んでくる。

まだ燃え盛っているゴブリン達の残骸を背景に、腕を組んで得意げな顔でクルツに目を向けるリーゼロッテ。

炎に照らされて輝く銀髪は神々しくも見え、もしかしてとんでもないものを連れ出してしまったのでは、という不安と共にその美しさにも見惚れてしまう。

「どうです？ マスターさん。少しは私の性能を理解しました？ こんなものは私の力の小指の先ほどにすぎません。燃料補給さえしていただければどんなことでも……ん？ 金属反応？ まだいるようですね」

ゴブリン達が出てきた茂み、その中から何か大きな塊が蠢く音をする。

軽くそちらを睨みつけるリーゼの眼前、茂みの中から甲冑に包まれたような足がずい、と踏み出される。

続いて行く手を塞ぐ木をなぎ倒しながら3m近くある巨体が現れる。
全身は鎧を思わせる装甲に覆われ、一本の角が生えた頭部に赤く輝く2つの目がリーゼを見下ろしてくる。

「あら……オーガまでいましたか。ま、だからどうということもありませんが」

巨体の腕が軋みながら振り上げられ、リーゼの頭上に振り下ろされる。
だが、褐色の肢体はしなやかに後ろに宙返りをしてもう一度宙に舞う。
再度、手の甲が展開して紅玉が現れる。リーゼの全力の火力を喰らえばあの程度の装甲など消し飛んでしまう。

しかし、輝き始めた紅玉の光が急速に衰えていく。訝しがるリーゼの視界にメッセージが流れると眉をひそめる。

「ね、燃料不足……？ いえ、さっき補給したじゃないですか……あ。久々の精液駆動だったからジェネレーターの調整が……ああもう！」

羽からも力が失われ、空中でぐらりと身体が傾けばそのまま地に落ちて膝をつくリーゼ。

地響きを立てながらリーゼに迫ったオーガは拳を振り上げ、叩きつける。
その拳がリーゼの頭部に叩きつけられる直線、組んだ腕が拳を防ぐ。
細い褐色の腕は見た目からは信じられぬほどの臂力を秘めているのか、さらに叩きつけられる拳にもびくともしない。

しかし、出力が上がらなくなったリーゼは防戦一方に追いつまされていく。
「く、もう！ こんなでかいだけのドロイドに……！ このままだと燃料切れが……！ ええい！」

一か八か、残ったエネルギーを全開にしてオーガをはねのけようとした時。
リーゼとオーガの間に、少年が滑り込む。
構えた両手に握られたタリスマンをオーガに突きつければ、青白い光が発せられる。

しかし。オーガは一瞬首を傾げるような動きを見せると、たじろぎもせずにクルツに目を向ける。
「え……効かない……！」

巨体の腕が振り下ろされる寸前。少年の腰が細い腕が抱きとめられたと思えば視界が横に流れていく。

クルツを抱えたまま子が下に逃げ込み、目尻を釣り上げるリーゼロッテ。
「この！ そんなことしないでいいっていったでしょう！ バカマスター！
死んだらどうするんです！」

「ご、ごめん……で、でもあのままだとリーゼさんが……」

「あの程度、自分でどうにかできましたよ。そのタリスマン、ゴブリン程度ならともかくあのクラスは電磁シールドされてるから効かないんですよ。ま、一応お礼は言っておきますが、もう無茶なことは……え？ ああ。なるほど、そういう手ならいけるかもですが……」

「じゃ、頼みましたよ……近づかなくていいですからね」
ゆっくりと木陰に向かってくるオーガに向かう前、少年に言葉をかければこくん、と小さく頷く。

その仕草にリーゼは少し顔を赤らめるが、悟られまいともう一度オーガに向き直る。

羽は開かず、四肢にのみ残ったエネルギーを集中させ、駆け抜けて一気にオーガに迫る。

単純な思考パターンしか持たない機械に過ぎないオーガは、前と同じく単調に拳を振り上げリーゼに叩きつけようとする。

その動きを予測していたリーゼは、す、と体を捻って交わしたところでオーガの腕に組み付いた。

そのまま、四肢のアクチュエーターを全開にして相手の関節をしめ上げれば、みしみしと金属が軋む音があがる。

「思ったより頑丈ですねえ……でもっ！」

ばき、と音がして関節の一部が碎け配線が千切れ飛ぶ。

それ自体は巨大なオーガにとってはさほどのダメージではない。しかし。

「マスターっ！ 今です！」

「う、うんっ！」

木陰から飛び出すクルツ。その手にあるタリスマンが輝くと放たれた電磁波はオーガの割れた関節からその制御回路に流れ込み、右腕が激しく暴れだす。

巨体から雑音と咆哮を漏らしながら、不自然な方向に手足がもがくように動き回り、姿勢を維持できなくなって膝をつく。

「はい。思ったより手こずらせてくれましたねえ……はああっ！」

リーゼが叫びとともにオーガの胸部装甲を掴み、その力で捻じ曲げていく。ボルトが弾け、装甲が引き剥がされればオーガの中枢回路がむき出しになる。

ふふ、と残忍な笑みをリーゼが浮かべると、その爪がジャキ、と音を立てて伸びていく。

そのまま手を大きく振りかぶり、渾身の力で回路につきたてた瞬間、爪から

高圧電流が放たれる。

残ったエネルギー、全てを変えられた電流が流れ込めば、オーガの回路が一瞬で焼け焦げて。

ぐらりと巨体がゆれ、物言わぬ鉄の塊が轟音を響かせて崩れ落ちる。

クルツは、先程まで恐れもあったことも忘れて笑いながら自分の使い魔となったサキュバスに駆け寄っていく。

「リーゼさん、すごい！ ゴ布林だけじゃなくてオーガまで倒しちゃうなんて！ ありがとう、リーゼさ……え？」

金属の羽が生えた、艶やかな褐色の背中。

それがぐらりとゆれて力尽きたかのように横に倒れる。

「ぴ……きゅう……燃料残量ゼロ……ジェネレーターがていし、しま……う、く……ちょ、ちょっと頑張りましたかね……エネルギーが、もう……アニメが少し残ってますけど、このままだと機能停止……あ。マスター……」心配そうな顔を浮かべたクルツがリーゼを抱き起こす。と、その左胸の中で快楽中枢回路が唸りを上げ始める。

「ぴぎゅっ！ セセ、性欲値が上昇、し、し……くはあっ！ ち、ちがいます！ これは、燃料切れのときにおきる正常な動作で……べ、別に、ちょっと優しくされたからって貴方に自身に欲情しているわけでは……がぴ！？

セ、性欲値設定が451.12%……ああもう！ し、しかたありません！ マスター、燃料補給をさせてあげま……あっ！ 勝手に、アーマーが……！」意識していないはずなのに、補給を促すためなのか申し訳程度に乳房と股間を覆っている装甲が収納されてしまう。

少年の眼前に晒される細い肢体に似つかわしくない大きな膨らみ。

その頂きの突起はつんと尖っていて、乳房自体も先程より張り詰めているように思える。

たちまちクルツの股間は盛り上がり、その様を見たリーゼの目尻が釣り上がる。

「あっ！ く、この……ちょ、ちょっと見ただけでそんなに……ほ、本当に恥知らずですね、このマスターは！」

「だ、だって……リーゼさん、すごく可愛くて……そ、その……」

「だ、誰が可愛い、ですか！ そこは綺麗とか美人とかでしょう！ 貴方よりずっと年上で……みゃああっ♡ そ、そこ、だめっ！ スイッチいじっちゃ……あひいいいい♡」

先程の行為を見て垂人と同じく左胸の乳首がスイッチになっているのだろうとクルツが気がついた通り、尖った乳首をひねられれば喘ぎながらリー

ぜのメンテナンスハッチが開いていく。

鼓動のように点滅する赤い光に魅せられたようにクルツの息は荒くなり。

「も、もうっ！ 信じられません！ 私の内部機構見て興奮してるなんて……あっ！ た、タリスマンはダメです！ この状態で使われたら本当にこわれちゃいますっ！」

「そんなことしないよ……でも……」

以前、亜人の女性の回路に触れて激しく悶えさせてしまった部位。

それと似た形の回路をつん、とつついてみる。

「……みぎゃあああ♡ かか、快楽中枢回路に不正なしんごうがががががひぎいいいっ♡ だめ、だめ、わたし、そこは、そこは、よわいんですううっ！ ぴぎゅがっ！ せせ性欲設定エラーがはっせいししし燃料残量ゼロっ！ 燃料残量ゼロっ！ たた、ただちに精液をちゅうにゅうししし機能停止機能停止しししひぎいいいっ！？ あーっ♡ あーっ♡ ますたあああっ！ はやく、はやく、いれてくださいよおおおっ！ もう、もう、えねるぎーがああ！ とまっちゃう、きのうていししちゃううううっ！ いじわるしないでいいでしょうっ！ たすけてくрасииいっ！ もう、もう、だめえええっ！」

先程の高慢な姿とは別人のように泣き叫ぶリーゼに、少年の劣情は抑えきれなくなる。

すでに限界まで勃起していたペニスをさらせば、こちらもう我慢できない、とばかりにリーゼの太腿を掴むと怒張を入口に擦り付ける。

「ん、あ……リーゼさん……リーゼさんっ！ く、あ、あーっっ！」
ぐちゅ、と粘液をかき分けながらリーゼロットの女性器ユニット、燃料補給口でもある割れ目に亀頭が差し込まれる。

内部のヒダに内蔵されたセンサー一つ一つが快楽信号を発生させ、胸の回路に送り込めばリーゼの人格モジュールは焼け付くような快感の奔流に犯され始める。

「ぴぎゃあああ♡ や、や、きもひいい、きもひいいいいいっ！ きもひよすぎて、かいろ、しょーと、するうううっ！ は、はやくうっ！ はやく、だしてくрасииい♡」

すでに精液が枯渇しているリーゼは、一瞬でも早く搾り取ろうと挿入しきった瞬間から全力でペニスを締め付けてくる。

緩んだ顔で藍色の眼を輝かせながら腰を振れば、淫靡な音と嬌声、そして時折漏れるノイズが森の中に響いていく。

「ん……くあっ！ さっきより、すごくしまって……ぼ、ぼくもきもちい

い……もっと……もっとっ！」

一秒でも長くこの快感を味わっていたい、その思いだけで必死に堪えるクルツに業を煮やしたのか、リーゼは馬乗りになってさらに奥までペニスを押し込んでいく。

生命を持たないシリコンの塊、男性から精液を搾り取るためだけに作られた機構が少年自身を締め上げ、搾り、舐めあげるような感覚で攻撃を続ける。「ぴゅああああっ♡ ま、ますたあ、ますたあ、はやく、はやく。も、だめ、りーぜろって、も、だめ。快楽信号が、しゅり、できな。な。ぴ、きゅう」「あ……あ……くあ……りーぜ、さ……ぼく、ぼく……んあ……も、も、ぼくも……っ！」

シリコンの肉壺の最奥に亀頭が潜り込む、それと同時に無意識に伸ばしたクルツの手がふるふると揺れる乳房に触れる。

もがく指が乳首を押し込めば。

「そ、そこ、すひっち、らめっ♡ や、やめて……ぎゃぴいいい！？ かかか感度設定ブーストがしようされされされひぎゃああああっ♡ #%TP0@!JA ああびぎゅががびぎゅんぴぎゅんぎゃぴいいい！？ みぎゃああああーっ！？ こ、ここ、こわれ、こわれ、こわれ、こわれるううううっ！？ いい、いく、いく、りーぜ、いっちゃうううううーっ♡」絶叫とともに唸りを上げて女性器ユニットの動作は最高潮に達する。その動きに少年が耐えられるはずもなく。

再び、リーゼの人造子宮に大量の精液が注入される。

すでにマスター登録をされているリーゼの電子頭脳は、精液センサーからの遺伝子情報がマスターのそれと合致したと認識する。

そのことがリーゼの感情値を引き上げ、快楽信号もさらに増幅され、完全に処理能力の限界を超えたリーゼはもはや言葉にならない激しいノイズをあげながら、全身の制御を失ってがくがくと痙攣を始めていく。

その表情のコントロールも失われ、きゅい、きゅい、と小さな音をたてながらアイカメラが収縮を繰り返し、顔面は緩みきってだらしない笑みを形作る。

数秒後、そのまま機能を停止したリーゼの身体は力を失い少年の上のにしかかる。

しかし、クルツもまた射精と同時に気を失っていて。

まだオーガとゴブリンの部品が焼け焦げる匂いが立ち込める中、森の中に静寂が戻っていった。

「この、クソダサイ服どうにかならないんですか？　そもそも私、寒さも暑さも気にならないんですから服なんかいらないんですけど」

「あの格好で村を歩かれたら僕のほうが困るってば」

魔族が恐ろしげなものである、ということは常識として皆知っている。

村に戻ったクルツは、リーゼのことを「道中で出会った亜人、ダークエルフという種族らしい」ということにして誤魔化した。

助手件居候として共に暮らし始めた二人だったが村の一員となった以上、雑用からは逃れられない。

泥で汚れた農作業着に身を包んでもその美貌は隠しようのないものではあったがリーゼの不満は収まらない。

「っていうか。なんでこの高貴なサキュパスが野良仕事しなきゃいけないんですか？　マスターさんはサボってるのに」

「僕は今回の件で今年は農作業免除になったからいいの」

不貞腐れながら鋤を手にするリーゼを尻目に、クルツは柵に座って書物の頁をめくっている。

「それ、私のおかげでしょう！　そもそも私がいれば領主の座くらいなら簡単に奪い取れますよ？　なんだってこんな辺鄙な村でのほほんとしてるんですか貴方は」

「別にそんなのどうでもいいよ。僕はここで静かに暮らせて、たまに亜人の人の整備したりして、あとは本読んで暮らせれば満足だしね」

「……やっぱり、ちょっとマスターさん、性癖に問題があるのでは？　夜も絶対、私の内部構造見てときのほうが興奮してますよね」

「そうかもね。でもリーゼさんも見られるとすごい勢いで回路点滅してるし……そんなに嫌だったら今日はなしでアニメ補給のほうがいい？」

確かにアニメの充電でも稼働はできるが、今のリーゼは数日もほっておかれれば性欲エラーで不具合が出るようになってしまっている。

うぐ、と口を歪めて主人を睨みつけるが、クルツはどく吹く風、と本から目を離さない。

「ま、まあ。いいですけど！　そのうち絶対、私の体に溺れさせてみせます。その時にはきっと私の力を欲望のままに奮う誘惑にも抗えなくなっているでしょう！　そ、その時が楽しみです！」

「あは、リーゼさんは本当に僕の役に立ちたいんだね。たまたま僕が主人になっちゃったからかもだけど……嬉しいよ」

「ち、ちが、そういうことじゃありませ……！」

真っ赤になったリーゼが歯をむいて睨みつけて掴みかかろうとした時、その背後からのんびりとした老婆の声がかかる。

「リーゼちゃん、ちょーっと手伝ってくれんかの？」

「あ、はい。ただいま……じゃなくって……く、マスターさん、このままじゃすましませんからね……と、とりあえず今日の夜は覚悟をしておいてくださいね！　今夜こそサキュバスの性能を……あ、おばあちゃん今いきますから……」

リーゼは柔らかな畑の土に足を取られながら駆け出していく。

本を読み続けるふりをしながらその姿を横目で捉えると、クルツは耐えきれなくなって吹き出してしまう。

いけないいけない、と笑い声がリーゼの鋭敏なセンサーに届かないように神妙な顔を作り直すと、再び本のページを捲り始めた。